八月十五夜月前に旧を語る　菅原道真

秋月は知らず古今有るを　一条の光色五更深し

語らんと欲す二十余年の事　珍重す当初傾蓋の心

【作者】菅原道真（八四五～九〇三年）平安時代中期の廷臣で漢学者，文人。是善の子。母は伴氏。右大臣。従二位。大宰権帥。菅公といわれる。貞観四（八六二）年文章生。同十九年文章博士。以後，宇多天皇の信任を得，藤原氏を抑えるために重用された。寛平三（八九一）年蔵人頭。同六年遣唐大使となったが，彼の意思によって中止された。その後，権大納言を経て昌泰二（八九九）年右大臣となったが，同四年藤原時平のために大宰府に左遷された。編書『日本三代実録』『類聚国史』，詩文書『菅家文草』『菅家後集』がある。後世，天神として尊崇された。（→北野天神縁起絵巻，天神信仰）

【語釈】＊有古今…「古今」昔と今，に「有」は違いがあること。「不知有古今」は昔と今に違いがないこと。

＊五更…更（こう）は夜の時間を区切って呼ぶ単位。深夜の零時は「三更」に属する。「五更」は午前四時頃。

＊珍重…ここでは書簡語。お大事に。ありがたい。忝ない。などの挨拶に用いる。

【通釈】「八月十五夜（はづきもちのよ）に月前に舊（むかし）を話（かた）る，各（おのおの）一字を分かつ」　菅原道真

秋月、古今有ることを知らず、一条の光色、五更を深し二十餘年（はたとせあまり）の事を談（かた）らんと欲するに珍重（ちんちやう）す、当初（そのかみ）蓋（きぬがさ）を傾（かたぶ）けし心を。